同窓生シリーズ 第86回

52回生

田久保 裕之

Hiroyuki Takubo

東京都立小山台高等学校
定時制課程
保健体育科教諭

略歴

1981年　東京生まれ
2000年　新宿高校卒業　同時に、新宿高校硬式野球部監督（～2005年）
2004年　日本体育大学体育学部卒業　学校体育研究室所属、レクリエーション研究会所属
2006年　東京都立園芸高等学校　軟式野球部監督（部員は常に9人）
2010年　東京都立小山台高等学校定時制課程　硬式野球班助監督
2014年　第86回選抜高等学校野球大会出場

「高校時代」

中1の頃、野球部の監督兼担任の先生に、野球も勉強も頑張れる高校はどこかと尋ねたところ、新宿高校を勧められました。よく調べてみると、定時制があるために17時下校（当時）という環境にも関わらず、結果を残していることに大きな魅力を感じました。

入学して印象的だったことは、生徒総会を行う体育館に先生の姿が1人もなく、すべて3年生が進行していたことです。俺たちが新宿高校を作っているのだと輝いている生徒がたくさんいました。

整備委員会では委員長を務めました。この頃、地球温暖化が話題となる中、新聞の一面に「『ダイオキシン濃度の高い場所』全国ワースト2位新宿御苑上空」と載る不名誉な出来事がありました。当時はまだ校内に焼却炉がありました。これは、我々新宿高生のゴミの出し方も見直さなければと、主事さんと協力してゴミ箱を増やし、ゴミの分別に取り組みました。委員が中心となって徹底的に教室のゴミを分別していましたが、次第にそれにかかる時間が少なくなっていったことを覚えています。先生方も生徒の意見をいつも寛大に受け入れてくれました。

硬式野球部では能力の高い仲間に恵まれ、チームワークも抜群。三期連続ベスト16、3年の春と夏はシード校でした。いま思えば、甲子園を狙える力もあったと思うのですが、まだ都立高校にとって甲子園が遠い夢物語の時代でした。しかし、同じくシード校だった城東高校が甲子園出場を果たし、都立高校にとっての甲子園は、夢から現実の目標となっていきました。

「進路選択と大学時代」

高1の冬には、体育大学に進んで高校の教員になりたいという目標ができました。こんなに充実して楽しい高校生活もたったの3年間。何かよい方法は無いものかと考えたところ、教員になればずっと若者たちと情熱をぶつけあうことが出来ると考えました。

大学入学と同時に、母校の学生監督となりました。当時、校舎改築とそれに伴う発掘調査があり、グランドが無い状況が長く続きましたが、部長の木藤章雄先生（平成18年度退職）はじめ顧問の先生方にご尽力いただき、都内、他県問わず転々としながら必死に活動しました。熱意に任せた私の指導も非常に未熟で、当時の選手たちには本当に申し訳なく思っています。

同時に、大学では教員養成のクラブに入部しました。各自治体教育委員会から依頼を受け、いわゆるキャンプのお兄さんの仕事やスキー教室、長野県の観光協会の手伝いにも出向きました。子どもたちの前で「プロとして」仕事を全うするために、毎日のように厳しい活動がありました。この時の経験が、いまの私の土台となっています。教員を目指す立場でありながら、学校現場で経験を積むことができました。

時には、朝練で母校へ行き、その後大学で授業を受け、夕方はまた母校で野球をし、夜は大学に戻って遅くまで活動、そんな目まぐるしく充実した日々を過ごしました。当時の保護者からは「大事な青春時代を犠牲にしてもらって申し訳ない」とよく言われましたが、とんでもありません。入学からの9年間を新宿高校で過ごせたことが私の青春そのものでした。

「教員となり甲子園出場」

はじめに配属された園芸高校では素晴らしい大自然と尊敬できる先生方、純粋な生徒たちに囲まれ、教員としての礎を築くことができました。そして平成22年から小山台高校の定時制課程に赴任しました。夜間定時制に勤務する傍らで、縁あって全日制硬式野球部の顧問を兼任できることになりました。その前年にベスト4入りしていた野球部の部員は100名に迫り、チームを3つに分けてどんどん試合に出ていきました。狭いグランドと17時下校という制約の中、野球はもちろん、日々の勉学、学校行事に全力で打ち込んで行く姿には、尊敬の念が尽きません。昨年度の秋季大会ではベスト8で敗退しましたが、立て続けに強豪校を制した戦いぶりが評価され、21世紀枠で選抜高等学校野球大会への出場が決まりました。もちろん、選手の力も大きかったのですが、それよりも学校の伝統、卒業生の力、生徒の力、地域の力、すべてが評価されて選んでいただいたと思っています。

試合は残念な結果となりましたが、甲子園を経験してわかったことがあります。それは、普段の練習の中に甲子園があるということです。甲子園といっても、プロ野球選手と試合をするわけでもなく、バッテリー間や塁間の距離が変わるわけでもありません。魔法にかけられることもありません。普段自分たちがやってきたものが、そのまま素直に出る場所でした。だからこそ、普段の学校のグランドで、いかに甲子園の心と技術に肉薄できるかが勝負になると痛感しました。

私には夢があります。それはいつか母校に戻れるチャンスがあったら、甲子園に出場し、JRに小田急線、京王線に西武線に地下鉄に、デパートでは高島屋に伊勢丹に、「新宿高校甲子園出場おめでとう」という垂れ幕、横断幕を掲げることです。そして新宿高校という文武両道の素晴らしい学校を、全国の皆さんに知ってもらうことです。

「新宿高校生へのメッセージ」

最近の新宿高校について伝え聞く話は、すべてが良い話ばかりです。先生方、生徒の皆様の奮闘ぶり、エネルギーと情熱が伝わってきます。

皆様は多くの方が大学進学を目指していると思います。立教新座高等学校の渡辺憲司校長先生が、東日本大震災の直後に卒業式で贈った「海を見る自由」というメッセージをご存じでしょうか。そこには、「なぜ大学に進学するのか」という問いが突き付けられています。

私は皆さんに、大学生活の中で徹底的に社会にフライングしてほしいと思っています。例えば、学校の先生になりたかったら、採用試験の勉強だけをするのでなく、予備校のチューターとして働きながら母校の部活動を手伝いにいく、弁護士になりたかったら、司法試験の勉強だけをするのでなく、法律事務所の雑用係として働きながら、暇さえあれば法廷に足を運ぶなど。本気の学生の前には本気の大人が必ず現れ、あなたを鍛えてくれます。こうして得た「経験」のみが、皆様を知らないうちに社会の即戦力へと育てあげてくれることでしょう。机上の学問では、「経験」を植え付けてくれることはありません。

社会の即戦力となった皆様は、引き続き自己を鍛え、何年かすれば新たな若者たちを育てていくことでしょう。全員が指導者です。日本の未来は安泰であると確信しています。